Cruises Historia

クルーズご意見番〝初代クルーズマスター 松浦睦夫〟が語る

ゆたか倶楽部 よもやま話

vol. 26

２００４年10月にスタートした、「約1か月かけて３５００キロを旅する／リバー・ダッチェスで航く東西ヨーロッパ大横断グランドクルーズ」は、回数を重ね、今ではゆたか倶楽部の独占クルーズとなり、これまでに17回実施しました。今回は趣向を変え、このクルーズ企画の主催をしているリバー・ダッチェスの船会社「ユニワールド」の日本地区総代理店オーシャンドリーム代表の堅田寛さんにお話を伺いました。

◇

全長１７１キロメートルのマイン＝ドナウ運河が完成したのは１９９２年です。長い年月をかけ、ヨーロッパ二大河川がようやく繋がり、北海から黒海まで貨物船や客船が行き来できるようになりました。

ユニワールドは創立40年のリバークルーズの専門会社で、20年ほど前からアムステルダム～ブダペストのコースが始まりました。これが実に内容が良く、日本のお客様にも楽しんでいただきたいと思い、今までもお付き合いのあったゆたか倶楽部様にご提案いたしました。それまで全くなかった長いリバークルーズなので、普通の旅行会社では取り扱いにくい商品だと思いますが、ゆたか倶楽部はクルーズ専門会社であり、世界一周クルーズの実績も多いので、お問い合わせのお客様へ丁寧な説明をしてくださるという安心感がありました。そこで日本では、ゆたか倶楽部のお客様だけの取り扱いにさせていただいて、今までにのべ３５０名様にご参加いただいております。

このコースの魅力は、東西ヨーロッパを川でたどることによって、一筆書きのように、文化や歴史、宗教が少しずつ違っていくのを感じられることです。それもひとつのクルーズで、寝ている間に次の目的地へ、というのが最大のメリットだと思っています。

昔から海洋国家として栄えたアムステルダムから、世界遺産のライン渓谷を登っていくと川幅が狭くなり、山が迫ってくるような景色に変わります。ブドウ畑があったり、古い教会があったり、丘の上には石造りのお城が建っていたり、何十年も何百年も変わりません。マイン河に入るともっと川幅が狭くなり、緑も深くなります。夏の朝は窓を開けておくと、鳥のさえずりで目が覚めることができます。これはリバークルーズならではの醍醐味でしょう。ドナウ河とライン河をつなぐ運河は、標高４００メートルもあります。アムステルダムは海抜０メートルなので、東京スカイツリーの３分の１ぐらいの高さまで水門をいくつも通り登っていきます。ドナウ河に入るとドイツの中世の美しい街並みが広がります。私が特に好きなのはドイツとオーストラリアの境にあるパッサウの街です。３つの河が合流するところで、規模は小さいのですが古いカトリックの司教団があり、冬はクリスマスマーケットで賑わいます。世界遺産もワインの産地も綺麗な街も多く、見所が尽きることがありません。

ヨーロッパは何年経っても何十年経っても景色や街の佇まいが変わらないと言いますが、人々の表情、特に東欧は随分変わりました。リバークルーズは岸との距離がすごく近いので、川辺で手を振ってくれる人々の顔まで見ることができます。子供や犬を連れて散歩する地元の人々、寒い朝はクラシックな農家の煙突から暖炉の煙が登り立ち、夕方は準備中の食事の匂いも漂ってくるような生活感こそが、一番の見所です。

リバーダッチェス

このリバークルーズは二回目、三回目のご乗船、という方もいらっしゃいます。これはきっとお客様のニーズにピッタリと合った事だと思います。船室は14平方メートルで、現在では広いとは言えませんが、それを差し引いてあまりある魅力があります。

５、６年前にゆたか倶楽部のお客様を乗せたクルーズで実際にあったことですが、途中で船を２回乗り換えていただきました。理由は増水で水門が閉じてしまったのです。川の場合、天候によって増水だけでなく渇水もありえます。自然のことなので船会社の責任は何もなく、本来なら船は運休、足止めになった港で解散になるのですが、今回は川の反対側で同じように足止めされている船と連絡を取り、お客様を車などで移し合い、クルーズを続けていただきました。

◇

今年は７月にリバークルーズを予定していましたが、世界的なコロナ禍の影響で中止となりました。コロナウイルス感染終息を祈り、早いクルーズ再開を望んでいます。